LIBER STUDIORUM

寺田寅彦

一

震災後復興の第一歩として行なわれた浅草凌雲閣（あさくさりょううんかく）の爆破を見物に行った。工兵が数人かかって塔のねもとにコツコツ穴をうがっていた。その穴に爆薬を仕掛けて一度に倒壊させるのであったが、倒れる方向を定めるために、その倒そうとする方向の側面に穴の数を多くしていた。準備が整って予定の時刻が迫ると、見物人らは一定の距離に画した非常線の外まで退去を命ぜられたので、自分らも花屋敷（はなやしき）の鉄檻（てつおり）の裏手の焼け跡へ行って、合図のラッパの鳴るのを待っていた。その

時、一匹の小さなのら犬がトボトボと、人間には許されぬ警戒線を越えて、今にも倒壊する塔のほうへ、そんなことも知らずにうそうそひもじそうに焼け跡の土をかぎながら近寄って行くのが見えた。

ぱっと塔のねもとからまっかな雲が八方にほとばしりわき上がったと思うと、塔の十二階は三四片に折れ曲がった折れ線になり、次の瞬間には粉々にもみ砕かれたようになって、そうして目に見えぬ漏斗から紅殻色（べんがらいろ）の灰でも落とすようにずるずると直下に堆積（たいせき）した。

ステッキを倒すように倒れるものと皆そう考えてい

たのであった。

塔の一方の壁がサーベルを立てたような形になってくずれ残ったのを、もう一度の弱い爆発できれいにもみ砕いてしまった。

爆破という言葉はどうしてもあのこわれ方にはふさわしくない。今まで堅い岩でできていたものが、突然土か灰か落雁（らくがん）のようなものに変わってそのままですするとたれ落ちたとしか思われない。それでもねもとのダイナマイトの付近だけはたしかに爆裂するので、二三百メートルの距離までも豌豆大（えんどうだい）の煉瓦（れんが）の破片が一つ二つ飛んで来て石垣（いしがき）にぶつかったのを見た。

爆破の瞬間に四方にはい出したあのまっかな雲は実に珍しいながめであった。紅毛の唐獅子（からじし）が百匹も一度におどり出すようであった。

くずれ終わると見物人は一度に押し寄せたが、酔狂な二三の人たちは先を争って砕けた煉瓦の山の頂上へ駆け上がった。中にはバンザーイと叫んだのもいたように記憶する。明治煉瓦時代の最後の守りのように踏みとどまっていた巨人が立ち腹を切って倒れた、その後に来るものは鉄筋コンクリートの時代であり、ジャズ、トーキー、プロ文学の時代である。

あの時に塔のほうへ近づいて行ったあの小犬はどう

したか。当時を思い出すたびに考えてみるのだが、これはだれに聞いても到底わかりそうもない。

こんな哀れな存在もあるのである。

二

ある日乗り合わせた丸の内（まるのうち）の電車で、向かい側に腰をかけた中年の男女二人連れがあった。男は洋服を着た魚屋（さかなや）さんとでもいった風体（ふうてい）であり、女はその近所の八百屋（やおや）のおかみさんとでも思われる人がらであった。しかるに二人の話し合っている姿態から顔の表情に

至っては全く日本人離れがしている。周囲のおおぜいの乗客はたった今墓場から出て来たような表情であるのに、この二人だけは実に生き生きとしてさも愉快そうに応答している。それが夫婦でもなくもちろん情人でもなく、きわめて平凡なるビジネスだけの関係らしく見えていて、そうしてそれがアメリカの魚屋さんとアメリカの八百屋（やおや）さんのように見えるのが不思議である。

二人ともにあるいは昔からの活動写真、近ごろの発声映画のファンででもあるかとも考えてみた。そうとでも仮定しなければ他に説明のしかたのないほどに、

あく抜けのしたヤンキータイプを見せていた。

喫茶店などで見受ける若い男女に活動仕込みの表情姿態を見るのは怪しむまでもないが、これが四十前後の堅気な男女にまで波及して来たのだとすると、これはかなり容易ならぬ事かもしれない。

天平時代の日本の都の男女はやはりこういうふうにして唐や新羅のタイプに化して行ったのかもしれない。

三

書店の二階の食堂で昼飯を食いながら、窓ガラス越

しに秋晴れの空をながめていた。遠くの大きな銀行ビルディングの屋上に若い男が二人、昼休みと見えてブラブラしている。その一人はワイシャツ一つになって体操をしてみたり、駆け足のまねをしてみたり、ピッチャーの様子をしたりしている。もう一人は悠然（ゆうぜん）としてズボンのかくしに手を入れ空を仰いで長嘯（ちょうしょう）漫歩しているふぜいである。空はまっさおに、ビルディングの壁面はあたたかい黄土色に輝いている。

　こういう光景は十年前にはおそらく見られないものであったろう。この二人はやはり時代を代表している。ジャズのはやるゆえんである。

四

一週に一度永代橋（えいたいばし）を渡って往復する。橋の中ほどから西寄りの所で電車の座席から西北を見ると、河岸（かし）に迫って無骨な巌丈（がんじょう）な倉庫がそびえて、その上からこの重い橋をつるした鉄の帯がゆるやかな曲線を描いてたれ下がっている。この景色がまたなく美しい。線の細かい広重（ひろしげ）の隅田川（すみだがわ）はもう消えてしまった代わりに、鉄とコンクリートの新しい隅田川が出現した。そうしてそれが昔とはちがった新しい美しさを見せているの

である。少し霧のかかった日はいっそう美しい。

邦楽座(ほうがくざ)わきの橋の上から数寄屋橋(すきやばし)のほうを、晴れた日暮れ少し前の光線で見た景色もかなりに美しいものの一つである。川の両岸に錯雑した建物のコンクリートの面に夕日の当たった部分は実にあたたかいよい色をしているし、日陰の部分はコバルトから紫まであらゆる段階の色彩の変化を見せている。それにちりばめた宝石のように白熱燈や紅青紫のネオン燈がともり始める。

白木屋(しろきや)で七階食堂の西向きの窓から大手町(おおてまち)のほうをながめた朝の景色も珍しい。水平に一線を画した高架

線路の上を省線電車が走り、時に機関車がまっ白な蒸気を吐いて通る。それと直交し弓なりに立って見える呉服橋（ごふくばし）通りの道路を、緑色の電車のほかに、白、赤、青、緑のバスが奇妙な甲虫（コレオプテラ）のようにはい上りはいおり行きちがっている。遠くにはお城の角櫓（すみやぐら）が見え、その向こうには大内山（おおうちやま）の木立ちが地平線を柔らかにぼかしている。左のほうには小豆色（あずきいろ）の東京駅が横たわり、そのはずれに黄金色（こがねいろ）の富士が見える。その二つの中間には新議会の塔がそびえている。昔はなかったながめである。百年前に眠ったままで眠り通し、そうして今この窓で目ざめたとしたら……。いつもこんなことを

考えながら一杯のコーヒーをすするのである。
震災前の東京は、高い所から見おろすと、ただ一面に鈍い鉛のような灰色の屋根の海であった。それが、震災後はいったいにあたたかい明るい愉快な色の調子が勝って来た。それと同時にそういう所で仰ぎ見る空の色が以前よりも深く青く見えだしたような気がする。これはコントラストのせいであろう。これほど著しい色彩の変化が都人の心に何かの影響を及ぼさないはずはないという気がする。
実際は東京の空気は年々に濁るはずである。自動車のガソリンの煙だけでも霧の凝縮核を供給することは

たいしたものであろう。寒い曇天無風の夜九段坂上（くだんざかうえ）から下町を見るといわゆるロンドンフォッグを思わせるものがある。これも市民のモーラルを支配しないわけにはゆかないであろう。

五

上野（うえの）のデパートメントストアの前を通ったら広小路（ひろこうじ）側の舗道に幕を張り回して、中に人形が動いていた。周囲に往来の人だかりのするのを巡査が制していた。なんとなく直感的にその幕の中には人が死んでいそう

な気がしたが、夕刊を見るとやっぱり飛び降り自殺であった。あまり珍しくないそれであった。

それから数日後にまた同じ屋上庭園から今度は少しばかり前とちがって建物の反対側へ飛んだ女があった。そうして庭園はついに閉鎖された。

また数日たって某大学の構内を通ったら壮麗な図書館の屋上に立ってただ一人玄関前の噴水池を見おろしている人がある。学生であるか巡視であるか遠いのでよくわからなかったが、少し変な気持ちがした。その後さらに数日たって後、同じ大学の中央にそびえた講堂の三階から飛んだ学生があったという夕刊記事を読

んで、また変な気持ちがした。この終わりの自殺者と、前の図書館屋上の人とはおそらくなんの関係もないかもしれないが、しかし自分の頭の中では前後四人の「屋上の人」がちゃんと一つの鎖でつながれている。

臆病者（おくびょうもの）の常として自分もしばしば高い所から飛びおりることを想像してみることがある。乾坤一擲（けんこんいってき）という言葉はこんな場合に使ってはいけないだろうが、自分にはそういう言葉が適切に思い出される。飛びおりてしまえば自分にはその建物もその所有者も、国土も宇宙も何もかも一ぺんに永久に無くなるのだから、飛ぶ場所の適否の問題も何もないであろうが、他の人に

はやっぱり世界は残存しその建物と事件の記憶は残るであろう。

また数日たって後の雪のふる日、ある婦人がその飼っていた十姉妹（じゅうしまつ）の四羽とも一度に死にかかったのを手のひらへのせて一生懸命火鉢（ひばち）で暖めていた。見ると、もう全く冷たくなってしまっている。しかし、「たとえだめでもそうしないと気がすまない」のだという。「人間が死んだらお経をあげると同じじゃありませんか」とその人はいう。

こういう唯心論者もまだ少しはいるのである。

六

ある大学講堂の前へ突き当たって右の坂道へおりようとする曲がり角(かど)に、パレットナイフのような形の芝生(しばふ)がある。きちょうめんにちゃんと曲がり角を曲がってあるくのと、その芝生の上を踏みにじって行くのとで、歩く距離にすれば三尺とはちがわない。しかし多くの人がその三尺の距離の歩行を節約すると見えて芝生がそこだけ踏みつぶされてかわいそうにはげている。この事を人に話したら、それは設計が悪いのだという。そんな所へ芝生をこしらえるのが間違ってい

ると言われてなるほどそれもそうかと思った。

上野竹の台の入り口に二つ並んで噴水ができた。その周囲の芝生に立ち入るなと書いた明白な立て札はあるが、事実は子供も大供も中供もやはり芝生に立ち入って水の面をのぞかなければ気が済まないのである。これもたしかに設計が悪いと言われなければならないのがいわゆる時代の推移であろう。二十年前だったら、設計も立て札も当然自明的であって、制札を無視するのが没公徳的で悪いのであった。

自分の郷里では、今は知らず二十年も以前は、婚礼の三々九度の杯をあげている座敷へ、だれでもかまわ

ず、ドヤドヤと上がり込んで、片手には泥だらけの下駄をぶら下げたままで、立ちはだかって花嫁や花婿の鼻の高低目じりの角度を品評した。それを制すれば門の扉の一枚ぐらい毀たれても苦情は言えなかった。これはむしろ一九三〇年を通り越していたとも考えられる。

今度法令が変わると他人の家へうっかり黙ってはいって来るものにはピストルを向けてぶっ放してもいいことになるという話である。これは芝生の場合とは逆の方向への推移である。もっともアフリカ内地へでも行けば、今でも、うっかり国境へ入り込んで視察で

もしていたというだけでもすぐ拘禁され、場合によると命があぶない所もあるかもしれない。

これらの事実の関係ははなはだ錯綜（さくそう）していて、考えても考えても、考えが隠れん坊をして結局わからなくなるのである。時代は進むばかりであとへはもどらないはずであるが、時代の波の位相（フェーズ）のようなものはほぼ同じことを繰り返すのかもしれない。しかしただ繰り返すだけではなくて、やはり何かしらあるものの積分だけは蓄積しているには相違ない。そうしてその積分されたものの掛け値なしの正味はと言えば結局科学の収穫だけではないかという気がする。思想や知恵など

という流行物（はやりもの）はどうもいつも一方だけへ進んでいるとは思われない。

七

妙な夢を見た。大河の岸に建った家の楼上にいる。どういうわけかはわからないが、この自分はもう数分の後には、別室に入って、自分からは希望しない自殺を決行しなければならないことになっている。その座敷というのがこっちからよく見える。大きな川に臨んだ見晴らしのいいきれいな部屋（へや）で、川向こうに見える

山は郷里の記憶に親しいあの山である。だれとも知れず四五人の人々がそばにいておし黙っている。五分、三分、一分いよいよ時刻が迫ったのでずっと席を立ってその別室へはいった。その時までは死ぬことに対しては全く平気でいたのが、そこへすわった瞬間に急に死ぬのがいやになった。それはちょうど大河の堤を切り放したように、生命への欲望が一度に汎濫（はんらん）した。と思うと大きな恐ろしいうなり声のようなものが聞こえて目をさました。

　二三日前にある友人とガリレーやブルノやデカルトの話をした。そうして、学説と生命とを天秤（てんびん）にかけた

三人が三様の解決を論じた。その時に頭を往来した重苦しい雲のようなものの中に何かしらこういう夢を見させるものがあったかもしれない。

ブルノは学問と宗教と生命とを切り離す事ができなかった。デカルトではこれが分化（ディフェレンシエート）されていたように見える。ガリレーはその二人の途中に立って悩んでいたのであろう。

この夢を見た夜は寝しなに続日本紀（しょくにほんぎ）を読んだ。そうして橘奈良麻呂（たちばなのならまろ）らの事件にひどく神経を刺激された、そのせいもいくらかあったかもしれない。臆病者（おくびょうもの）はよくこんな夢を見る。

（昭和五年三月、改造）

底本：「寺田寅彦随筆集　第二巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店
1947（昭和22）年9月10日第1刷発行
1964（昭和39）年1月16日第22刷改版発行
1997（平成9）年5月6日第70刷発行
入力：（株）モモ
校正：かとうかおり
2003年6月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。